新「共通特論Ⅰ」：臨床腫瘍学総論

# 個別化医療における臨床薬理

講義日：2022 年 6 月 25 日（土）

講師：南　博信（神戸大学　腫瘍・血液内科学　教授）

**要旨**

400 字程度でご記入下さい。

抗悪性腫瘍薬は重篤な副作用が出現する用量と効果が期待できる用量が近接した治療域が狭い薬物である。薬物動態や薬力学の個体差により、標準的な用量を用いても時に重篤な副作用を生じ致命的となりうる。抗悪性腫瘍薬は治療域が狭いため、その吸収・分布・代謝・排泄で規定される薬物動態の特徴を十分理解した上で使用しなければならない。さらに各患者の臓器機能・年齢・遺伝的多型、薬物相互作用などが薬物動態や薬力学の個体差の要因となる。これらも十分理解して治療を科学的に個別化する必要がある。これらの臨床薬理学的知見を理解せずに治療にあたると患者に重大な不利益を引き起こす。一方、抗悪性腫瘍薬の安易な減量も効果不十分という重大な不利益を患者に強いる。臨床薬理学を理解することなく抗悪性腫瘍薬を使用することは慎まなければならない。本講義では抗悪性腫瘍薬の臨床薬理の基本を解説する。